



## 統計から社会の実情を読み取る

### 第80回 食の地域分布：平準化とソウルフード化

**本川 裕** | Honkawa Yutaka  
アルファ社会科学株主席研究員

■東京大学農学部農業経渓学科卒。専門は農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、ネット上で「社会実情データ図録」サイト (<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>) を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著作は、『統計データはおもしろい!』(技術評論社、2010年)、『統計データが語る日本人の大きな誤解』(日本経済新聞出版社、2013年) 等。ダイヤモンド社のダイヤモンド・オンラインにWebコラム「本川裕の社会実情データ・エッセイ」を連載中(隔週)。



#### 牛食地域と豚食地域の相互浸透

納豆を余り食べなかった西日本でも納豆をかなり食べるようになったり、以前は昆布だしを余り使用しなかった関東でも、近年はよく使うようになったり、食の地域分布については全国的な平準化が進んでいると思われる。

この点を、いまや日本人の食生活の柱となっている肉消費で、まず、確かめてみよう。

図1には、家計調査によって、肉消費に占める牛・豚・鶏の割合について、地域(県庁所在市)別の50年の変遷を追ったグラフを作成した。

50年前(1963~65年)には、牛肉と鶏肉の「西高東低」、豚肉の「東高西低」の地域構造が明確だった。ところが、50年後の現在(2013~15年)には、その傾向は残っているものの、かつてと比べると明確ではなく、食のパターンの全国平準化の進行を典型的にうかがわせる結果となっている。

全国平準化は、こうした東西といった大きな地域別の傾向の変化とともに近隣県どうしの差異が小さくなった点にもあらわれている。図で

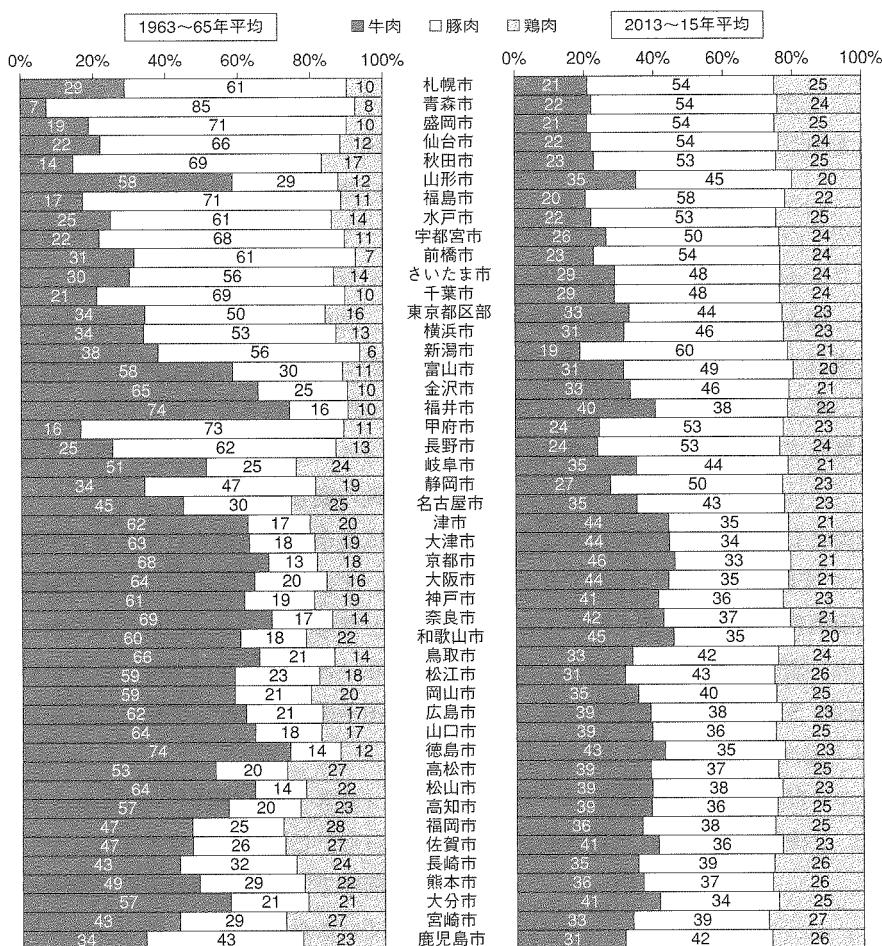
は、近隣県における割合の段差をあらわすギザギザがずいぶん滑らかになっていることから、それがうかがわれる。

牛肉消費は、かつては、北陸、近畿及び四国の3地域で特段に多かったが、今は、北陸や四国は目立たなくなつたため、唯一、近畿の府県が軒並み40%以上と(かつての軒並み60%以上よりは縮小したものの)国内で最も牛肉好きの地域となっている。ただし、牛肉消費は西高東低の地域構造をもつてゐるが、九州地方は西日本の中では消費が比較的少ない点が昔も今も変わらない特徴である。

山形牛というブランドがあるが、東北の中では山形はかつても今も牛肉消費が特別多いことが目立つてゐる(50年前は牛の割合が50%を超えていた)。

豚肉消費は、かつては85%の青森市から14%の徳島市や松山市と食べる地域と食べない地域との差が71%ポイントと大きかったが、今では新潟市の60%から京都市の33%まで28%ポイントの差にまで縮まつてゐる。

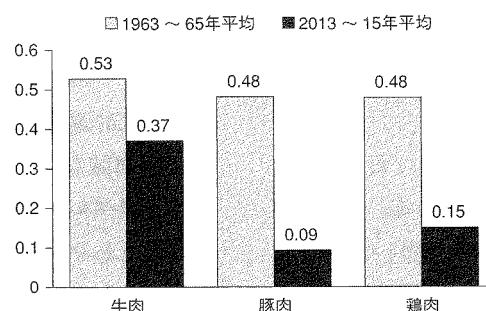
図1 地域別の肉消費：牛豚鶏構成の変遷（県庁所在市）



注) 二人以上世帯の1世帯当たり品目別年間支出金額の割合。さいたま市の1963～65年は浦和市のデータ  
資料) 家計調査

図2 地域別の肉消費：牛豚鶏のばらつきの推移

都道府県消費額の変動係数(標準偏差÷平均)



注・資料) 図1と同じ

鶏肉消費は、かつては西高東低の地域構造をもっており、牛肉と違って、消費の多い西日本の中でも九州がもっとも割合の高い地域となっていた。今は、ほぼ消費が全国的に平準化した中で、東北と九州がやや多いというパターンになっている。

鶏肉は飼料がそのまま肉になる程度が高いので、物流費のウェイトが高い。東北と九州の消費が多いのは、輸入原料を主とする我が国の飼料生産拠点が東日本の太平洋岸と南九州に集中立地していて、そこから遠くない地域にブロイラー生産が集積している影響もあると考えられる。

平準化の指標としては、データのばらつきの程度をあらわす変動係数が使われることが多い。肉の地域別消費額の変動係数を調べてみると、牛肉、豚肉、鶏肉の値は、それぞれ、この50年間に3割減、8割減、7割減とすべてで大きく値を減少させている（図2）。特に、豚肉と鶏肉のばらつき度の低下はめざましい。これらと比べると、牛肉は、今でも、東西差がかなり残っている。

## 平準化とともにソウルフード化する食品も

多くの食品でこうした食の地域分布の平準化傾向が認められるが、一部では、これに反する動きも見られる。

この点を、ソース消費の地域動向から探ったグラフを図3に掲げた。

広島風お好み焼きで有名な広島市でソース消費量が非常に多いことはよく知られており、图にもはっきりとこの点が示されている。

広島市に次いで、ソース消費が多い地域を2000～16年の平均で多い順に10位まで並べてみると、岡山市、神戸市、徳島市、大阪市、

奈良市、鳥取市、京都市、松山市、大津市となっており、西日本で多く消費されていることが分かる。

その中でも、岡山市は、2番手の位置から抜け出し、最近、広島市を押さえて2年連続でトップに躍り出た点が目立っている。

一方、調味料の多様化などの影響によりソース消費額が全国的に減少傾向にある中で、神戸市、徳島市など3位以下の地域でもソース消費は振るわず、広島市と岡山市の消費が堅調なのと対照的な動きを示している。

図4には、ソース消費に関して地域別の変動係数の動きを示した。

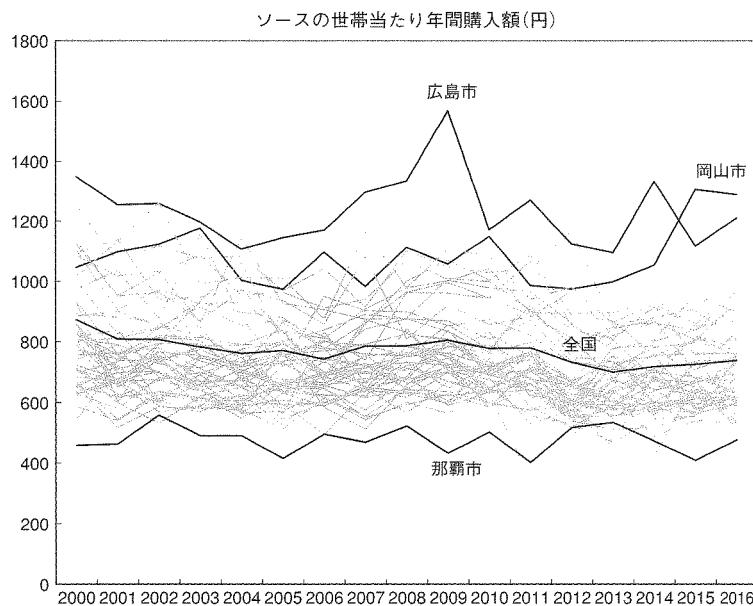
広島市と岡山市を含めると変動係数は上昇傾向、すなわち平準化とは逆に地域特化が進む傾向となっているが、これと対照的に、この2市を除いた変動係数は明確に低下傾向、すなわち全国平準化が進行していることをあらわしている。

ソウルフードという言葉をよく聞くようになった。これは、ソウル・ミュージックなどの関連で米国南部の黒人の伝統的な料理を意味していたが、今では、魂（ソウル）がこもっている地域的な料理・食材を指す一般用語としても用いられるようになった言葉である。

この言い方を借りるならば、ソースの消費に関しては、広島市・岡山市におけるソウルフード化とそれ以外の地域での平準化が同時進行していると認められるのである。

ギョウザの消費日本一はどこかが話題となるなど、家計調査を利用した食品の地域分布の記事が週刊誌などをにぎわせることが多くなった。B級グルメ大会など地域的な特色のある食へのこだわりも高まっている。行政が、松坂牛や草加せんべいといった地域名と商品名をセットにした地域ブランドを保護するため、地域団

図3 ソース消費の地域動向

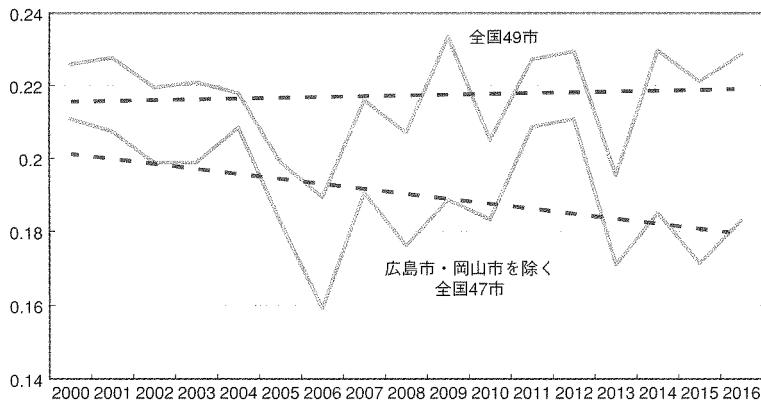


注) 全国49市（都道府県庁所在市及び2000年以降継続してデータが得られる川崎市、北九州市）が対象  
資料) 総務省統計局「家計調査」

図4 ソース消費の地域的ばらつき

\*点線は一次回帰線

ソースの世帯当たり年間購入額の変動係数(標準偏差÷平均)



注・資料) 同上

体商標制度（特許庁）を設けたのも、こうした流れと無関係ではあるまい。

いいものはいいという情報流通の広がりや速度が加速度的に高まっている中で、商物流の全国ネットワーク化が進み、食品消費の全国平準

化は押し止めようもない基本動向となっているが、その一方で、こうした地域食品のソウルフード化とも呼べる現象もまた、今後、同時進行していくものと思われる。